広島経済大学研究論集
第42巻第２号　2019年11月
http://dx.doi.org/10.18996/kenkyu2019420201

# 資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか（1/2）

内　海　和　雄*

目　次

1.　課題設定
2.　研究方法論：若干の前提
　2.1　運動欲求と文化的充足
　2.2　スポーツの誕生と本質
　2.3　余暇の所有
　2.4　スポーツの公共性
3.　資本主義とスポーツの発展：先行研究
　3.1　E・ダニング
　3.2　R・ホルト，JA・マンガン
　3.3　T・ヒューズ
　3.4　A・ヴォール
　3.5　A・グットマン
　3.6　T・コリンズ
　3.7　先行研究のまとめ（以上本号）
4.　封建制社会と「スポーツ競技会の消失」（以下次号）
5.　イギリスの資本主義化
　5.1　マニュファクチュア化
　5.2　18世紀の５大戦争勝利と更なる資本の蓄積
　5.3　産業革命化
　5.4　創られた伝統
6.　「分業と協業」の発展
　6.1　道具と機械と身体
　6.2　マニュファクチュアから産業革命へ
7.　近代スポーツはなぜ，イギリスで発祥したのか
　7.1　近代スポーツの２つの範疇
　7.2　マニュファクチュア期：近代スポーツ誕生の第１期
　7.3　産業革命期：近代スポーツ誕生の第２期
8.　資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか
　—分業と協業の発展に規定されて—
　8.1「創られた伝統」としてのスポーツ
　8.2　ブルジョアの身体的・精神的要請との一致
　8.3　パブリック・スクールの役割

* 広島経済大学名誉教授

## 1.　課　題　設　定

「資本主義はなぜ，女性にスポーツを普及させるのか」[1] で次のように述べた。資本は労働者を搾取することで富の源泉を形成するが，その場合，より安い労働力を求めて，労働者の属性を問わない。つまり男性，女性，子ども，高齢者さらには宗教，門地，国籍等には本来的には無関心なのである。これは16～19世紀だけでのことでなく，現在でも企業はより安い労働力を求めて国際移動をしていることからも理解できる。

さて，女性も労働力として求められたということは，女性の社会参加を促進する基盤となる。その点から見れば，労働者階級の女性の労働進出は最も古いが，彼女たちはいち早く女性権利運動や，女性スポーツ運動に参加したわけではなかった。彼女たちは長時間労働，過重労働を課せられ，社会参加やスポーツ参加に必要な余暇やお金や教育が得られなかったからである。

これに対応したのが19世紀末イギリスの中産階級の女性であった。彼女たちは積極的に社会に進出し，新たな職業を創造し，男性との同等な諸権利獲得運動に立ち上がった。その一環にスポーツとの出会いがあった[2]。その事実は多少研究されているが，「資本主義はなぜ，女性にスポーツを普及させるのか」については先行研究では問われてこなかった。

同じくスポーツと資本主義との関連でこれまで問われてこなかった問題がもう一つある。原始社会での誕生以来，スポーツはもっぱら個人スポーツ（個人種目）に限られてきたが，「資

本主義以前はなぜ，集団スポーツ（集団種目）を産まなかったのか」そして「資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか」という問いである。レスリング，ボクシング，競走，水泳等の個人スポーツは，古代の狩猟や戦闘に端を発し，ギリシャ・ローマ時代に地中海地方に年間100を超える国家行事として「スポーツの競技会」が享受されていた。これだけスポーツの発展を見たにも拘わらず，それらはすべて「個人スポーツ」であった。その後中世の戦闘行為から発するフェンシング，剣術，空手，柔術などのマーシャルアーツがあり，現代では卓球，バドミントンなどの球技も含まれる。これらも「個人スポーツ」である。（その後ダブルスなども行われるようになった。）

「なぜイギリスで近代スポーツは発祥したのか」という問いは発せられたことはあるが，「近代化，産業化がそうさせた」程度の回答であった。この点は，イギリスが最も早く資本主義化をしたからであると考えられているが，では資本主義化の何が，産業化の何が規定したのだろうか，この点での追究も弱い。近代スポーツと言うとき，スポーツ全般を意味し，個人スポーツと集団スポーツの識別が弱い。しかし明らかに集団スポーツは19世紀中頃に産まれたのである。これまで集団スポーツの代表格であるサッカーやラグビーがどのように産まれてきたのかについての歴史研究はあるが，ではそれらが資本主義のいかなる要因によって可能であったのかについての原因は究明されていない。

集団スポーツは主にサッカー，ラグビー，クリケット等の球技であり，それらから派生したホッケー，ハンドボール，バレーボール，バスケットボール，野球などがある。サッカーやラグビー等は後述するようにイギリスの中産階級（産業資本家，ブルジョアジー）によって意図的に「創られた伝統」である。「資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか」あるいは「それまではなぜ，集団スポーツを産まなかったのか」という問いは，集団性を要請しなかった社会・歴史と，集団性を要請する資本主義との差異を意味している。

ともあれ，「女性スポーツの誕生」「近代スポーツの発祥」「集団スポーツの誕生」は全てイギリス資本主義の成立過程での事象である。時系列としては「近代スポーツ」「集団スポーツ」「女性スポーツ」ということになる。

## 2.　研究方法論：若干の前提

本稿では「近代スポーツ」「集団スポーツ」に焦点化するが，以下，４つの視点を研究方法論の前提として概観しておきたい。もちろんそれらは独自の展開を必要とするが，詳細は引用文献を参照していただきたい。これらの項目を今改めて強調するのは，スポーツの歴史を論じるとき，社会背景や享受主体の階級などを全く無視して，あたかも真空の中でスポーツが発展して来たかのような記述もあるためである。

### 2.1　運動欲求と文化的充足

人間には本能として，食欲，睡眠欲，性欲，運動欲等がある。人類は５万年前に生物としての進化を止めた。進化が無ければ環境への適応が出来ず，滅亡し絶滅する。しかし人類は労働を産み出し，自然界へ働きかけて変革し，農耕を行い，住居や衣服を産み出して環境を人間に適応させた。こうして単なる自然界からの採集，狩猟から脱出して，進化を止めた危機から脱出した[3)]。

とはいえ，生物として毎日一定のカロリー摂取と消費を必要とする。老若男女あるいは体格の大小によって差はあるが，例えば１日に 2,200 Kcal の摂取と消費を必要とする。人類史は必要なカロリーを摂取するのに苦労した。例えば「摂取・消費」で見れば，「少量摂取・大量消費」の「欠乏の歴史」である。（一方，高度経済成

長以降は「大量摂取・少量消費」の「飽食の時代」であり，生活習慣病などの退化現象を引き起こしている。)[4] いつの時代にも人類は運動を必要としている。運動量が長時間労働や重労働で大きく消費されている場合には，精神的な快楽を別とすれば特別な運動を必要とはしない。しかし不足する場合には何らかの運動を必要とする。スポーツはその運動の重要な構成要素だが，スポーツ要求は次項で見るように単に身体的要求ばかりでなく，精神的な要求でもあり，両者の結合された要求である。

## 2.2　スポーツの誕生と本質

スポーツは原始社会における狩猟労働や近隣集団との戦闘に対応する２つのトレーニング化（プレイ化を含む）を主要な基盤として誕生し，時には宗教行事の中で奉納や祈祷として行われるようになった。そのためスポーツの起源をめぐっては，労働起源論だけではなく，プレイ起源論，宗教起源論が存在する。プレイ起源論とはＪ・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』における人間，文化の基盤は「プレイ」であるという理論に基づいている。確かにスポーツはプレイ要素（面白さ）を含んだ文化であるが，ホイジンガはそのプレイの源泉を問うてはいない。スポーツのプレイ（面白さ）とは，身体と精神のそれぞれの興奮を内包したものであり，それは労働と戦闘を起源とする活動である[5]。

また，宗教起源論は，スポーツが多く宗教催事に行われたということがその理由であるが，それと起源論とは別である。また，近代スポーツの特徴の一つが脱宗教性だとはＡ・グットマンの指摘であり，妥当であるが，近代スポーツの発祥がまったく脱宗教的であるとすれば，宗教起源論のスポーツ把握の一貫性が崩壊する。これはプレイ論でも同じで，近代スポーツの発祥がプレイ（面白さ）を求めることだけに求めるとすれば，そんな表層的な把握は支持を得られない。古代も現代もスポーツはそれぞれの社会の運動欲求が，それぞれの時代の社会的諸条件を反映させて誕生し，発展したものである。

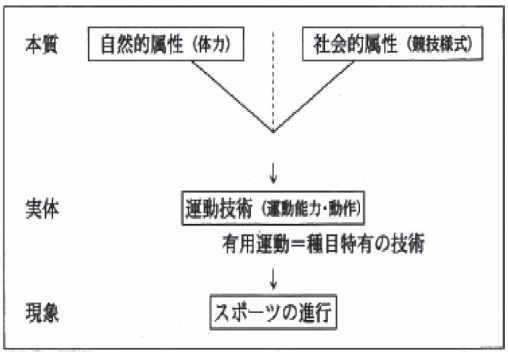
こうして，スポーツは労働と戦闘を起源，基盤とする文化である。しかしその労働と戦闘の身体的かつ精神的興奮の内容は，労働と戦闘に直結したものではなく，そこにはルールによって暴力性を緩和したり，面白さを加味する工夫がこらされている[6]。

### 2.2.1　本質レベル

スポーツとは身体形成を意図（内包）した自然的属性（体力）と社会的属性（ルール，道具，競技様式）とが「本質レベル」で結合したものである（図表１参照）。

自然的属性（体力）とは社会の身体的要請に応える側面である。ただそれだけでは単に身体を挙動不審に，無秩序に動かすだけである。しかしその内容が社会的属性（競技様式）と結合することによって，運動文化としての表現形式を持つことが出来る。社会的属性とはスポーツのルールとして集約される。つまりルールとは「場所（競技場）」「用具」「行動規範（反則行為など）」「行動様式（時間，競技方法，得点方法）」などの内容から構成される。

自然的属性を含まず，社会的属性における競技性だけの視点であれば，それは囲碁，将棋，




出典：内海和雄『スポーツの公共性と主体形成』不昧堂出版，1989，p. 198

**図表１**　スポーツの本質と構造

チェス，トランプそして近年の e-sport（スポーツを題材としたデジタルゲーム）等である。こうした２つの属性の統一体であるところにスポーツの独自性，特殊性がある。この点を強く自覚する必要がある。後述するように，スポーツの歴史を把握するときに，こうしたスポーツの本質が曖昧であり，社会の身体的要請がいかにスポーツに反映されるかの把握が弱くなるのがこれまでの傾向である。

**2.2.2　実体レベル**

自然的属性と社会的属性が「実体レベル」で結合され運動技術となる。有用運動とはルールや道具が各スポーツに独自の，運動特有のものである。つまり運動技術が運動ごとに異なる（＝有用運動）。運動技術は身体的運動でもあるから，その運動技術をマスターし，行為することは体力の育成ともなる。日常の練習は多くはこの運動技術の習得に向けられる。それが戦術を伴い，相手の戦術を想定した対応や，臨機応変の出来る体力，技術，思考を鍛えながら多様な運動技術が開発される。

種目特有の運動技術（有用運動）も種目間で共通する要素もある。例えばバスケットボールとバレーボールでの手・腕を使ったボール操作，目より上のボール操作での空間認識などである。また，野球とテニスの打球や捕球時におけるボールの軌道の読みと打点，捕球点の確定などである。従ってバスケットボールの選手はバレーボールも上手であり，野球選手はテニスも上手である。逆も真なりである。

**2.2.3　現象レベル**

「現象レベル」とは，こうした運動技術，体力，戦術を競いながら高度な戦術，速攻，フェイント等，相手にとって，そして時には見方にとっても偶然的要素を加味しながら競われる。体力，技術，戦術そして気力で相手を上回ることを競う。こうして「スポーツは筋書きのないドラマ」となる。（演劇は脚本という筋書きを着実に豊かに演じ，あらかじめ決められた結末に至る。）最初から能力の大きく異なるチームの対決は試合前に勝敗が概ね判っているからあまり興奮を生まないのであり，面白みに欠ける。高度で同等な能力の選手あるいはチーム同士の場合，プレーが拮抗し，プレーヤーのみでなく観客もまた試合の興奮度はさらに増す。高度な能力を持つ個人やチーム同士の対決は，観客の予想を遙かに超える技術水準，偶然性を含むから，その興奮度，面白さも増すのである。

ところで，スポーツは無形文化財であり，それ自体を直接に見たり，手に触れることは出来ない。人間によって表現されることによって，我々はスポーツを演じ，見ることが出来るのである。

近年，テレビゲーム，電子ゲームにおけるスポーツプログラムを e-sport として論じているものもあるが，それは将棋，碁，チェス，トランプなどと同様に競争的ルールを含むが，大筋群活動，身体形成を含まない，いわば社会的属性だけのゲームである。従って，自然的属性をも内包したスポーツとは根本的に異なる。身体的能力や体力の向上には結びつかない。（ただ，スポーツと銘打った方がキャッチコピーとして得策であることから，そうしているように思われる。）

スポーツとは自然的属性と社会的属性の両者の統一体であるから，時代や社会のスポーツへの要請はこの両側面で把握する必要がある。つまりスポーツの歴史を語るとき，その時代，社会の身体的要請と精神的，社会的要請の両側面からの検討が必要である。特に，前者の身体的要請が曖昧化されるのが一般的であり，スポーツ論としては不十分となる。

**2.3　余暇の所有**

第３の前提として，余暇の所有に触れておきたい。スポーツは余暇行為の一環であるから，

スポーツをする上では余暇の所有が前提となる。余暇は人間の生活における労働と，生理的生活（食事，排泄，睡眠，入浴他の生命にとって必須）の時間とを除いた後に残った時間，つまり可処分時間が前提である。その時間帯をただボーッと過ごしているだけでは動物一般と同じで，余暇とは言わない。余暇とは心身の積極的な活動を伴う，極めて人間的な活動であり，人間性を豊かにさせる行為である。余暇活動はある程度の経費を必要とするから，可処分所得も必須である。そして享受される文化自体も前提となる。歴史的に見れば余暇の所有は支配階級の特権であり，余暇に行われるスポーツもまた特権階級の所有であった。

スポーツの歴史研究を見ると，享受主体と彼らを取り巻く社会環境の記述がなく，歴史上の誰もがスポーツを楽しんだかのような描写のものが多い。これでは全ての階級の人々が万遍なくスポーツに参加してきたことになってしまう。女性が排除されてきたことも全く視野の外に置かれてしまう。そうではなく，余暇の所有，スポーツの所有とは歴史的に見れば，厳然として支配階級の，男性の文化だったのである。

労働は生存に直結するが故に不可避であるが，余暇は「それ以外」である。この点で，「労働は神聖，余暇は怠惰」との倫理観が宗教観や労働観も関わって，長い間に形成されてきた。そのため労働に比べてスポーツの価値は低く扱われてきた。これを反映して現代においても，労働研究に比べて余暇研究，スポーツ研究も軽視されてきた。しかし『資本論』をはじめとする多くの著書で資本主義や労働を深く広く研究したK・マルクス（1818–83）は，人間ないし人間性の成長発達にとって，労働時間の短縮＝自由時間の拡大の意義を誰よりも強く認識していた。余暇において学習し，文化を創造し，人間間のコミュニケーションを発展させる，こうしたことが人間性の発展そのものなのである。スポーツは余暇活動の重要な一環である。マルクスの生きた19世紀，特にその中盤から後半に掛けて，スポーツはイギリスの資本家階級に普及し始めていた。もしアマチュアリズムに依って排斥されずに，労働者階級にも普及していたならば，彼もまたスポーツの意義をもっと強調したであろう。

ともあれ，余暇の一つであるスポーツもまた，その普及にはその時代の経済条件，政治条件，人権条件，福祉条件が大きく関わる，まさに社会的事項である。従って，資本主義社会におけるスポーツの誕生と普及の背景には資本主義社会の経済的，政治的，社会的基盤の究明が不可避である[7)]。

### 2.4　スポーツの公共性

明治の文明開化以降，日本のスポーツは長らく社会的エリートである学生によって，そして戦後は企業選手に支えられてきたことから，アマチュアリズムの発祥国のイギリス同様に，ブルジョア個人主義に規定されたアマチュアリズムの強い国であった[8)]。そして現在の新自由主義的思想と政策の下で，スポーツの個人主義化が政策的に強調されている。つまりスポーツは個人的営為だとのイデオロギーが根強い。先日も福祉に熱心なある地方議員との話の中で，彼は「スポーツは福祉ですか？」と最後まで怪訝（けげん）そうな顔をしていた。

スポーツを恒常的に楽しむにはスポーツ施設（土地と建物），スポーツ指導者，スポーツクラブが必須である。施設一つ採ってみても，大きな土地と施設・設備が必要であり，これは個人では対応できない。だから公共が用意して，国民，地域住民に安価に，あるいは無料で貸し出すからスポーツが普及するのである。もしそれらが私営であるならば使用料が高価となり，一般市民には利用できない。とすればそれらを活用するスポーツ文化は普及できない。この点だ

けからもスポーツの普及には公共（国，自治体）の援助が不可欠なことは明白である。スポーツの普及に言及する場合，この視点を抜かしてはならない。さらにスポーツの普及には指導者が必須である。技術の向上，安全の確保など，専門性を持った指導者の養成は大学の講座開講などを含めて国の課題である。そして地域にスポーツが普及し，日常的に享受されるにはクラブが必須である。そのクラブ運営と活動への援助（施設の提供，指導者謝礼の補助，組織運営の助言他）は地域スポーツ発展の基盤である。戦後の西欧，北欧の福祉国家における「スポーツ・フォー・オール政策」はそのことを公共が義務として率先したものである。

それに対応して国民のスポーツを享受する権利（スポーツ権）が存在する。つまり国民のスポーツ権は公共の条件整備義務とセットなのである。その権利と義務が成立した時に，その事項の公共性が成立するのである。その点で，スポーツの権利が成立するには公共の義務も指摘すべきであり，後者の無い権利は「自由権」としての権利であり，「社会権」としてのものではない。日本の「スポーツ基本法」（2011）は国民のスポーツ権を明記したが，国家の条件整備を義務として明記しない，自由権レベルのものである。一方，福祉国家のスポーツ権は社会権としてのものであり，国家の条件整備義務を遂行している。社会権としてのスポーツ権と国家の条件整備義務は福祉国家における福祉政策の一環として誕生したものであり，条件整備の進捗度が福祉政策の進捗度のバロメーターなのである[9)]。

## 3.　資本主義とスポーツの発展：先行研究

近代イギリスにおいてスポーツがどのように産まれてきたのかについての歴史研究はある程度存在する。以下，先行研究を検討するが，それらは総体として歴史的経緯の概略を捉えている。各研究者の論点を内海の視点から総体が分かるように整理しつつ，さらに，次の２点について特に注目したい。

① 近代スポーツはなぜ，イギリスで発祥したのか

② 資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか。

### 3.1　E・ダニング

N・エリアスはE・ダニングとの共著『スポーツと文明化―興奮の探究―』の中で，次のように述べた。興奮は「人間の最も基本的な要求の１つ」[10)] であるが，中世までの興奮の表出は社会の規制の緩さを反映して，現代から見ればかなり乱暴であり，暴力的なものも許された。例えば古代オリンピックにおけるボクシングやレスリングでは余り細かなルールは無く，相手がギブアップしなければ，ルールの範囲内で殺しても罰せられなかった。同じように，中世の民俗フットボールではボールの争奪を巡って，あるいはボールはそっちのけで乱闘が起き死人も出たり，怪我人も多数いたが，犯人が罰せられることは無かった。

しかしイギリスでは近代化の過程で，議会を中心とする非暴力化が進んだ。従来の議会選挙では勝者による敗者への暴力的報復が繰り返されてきた。しかし18世紀に入ると非暴力化（近代化，文明化）が少しずつ成し遂げられていった。それは単に議会に留まることなく，社会全般の規範となり，人々の日常生活も自制化が強く求められるようになった。これによりこれまでの社会では許されていた数々の暴力的な興奮の形態（これは後に述べる民衆のブラッドスポーツ等）に歯止めをかけ始めた。こうした規則化（文明化）される社会の中で，社会的に耐えがたい無秩序や人間同士の傷害行為の危険を避けながら，楽しい興奮を共有できる文化が求められた。これに応えたのがスポーツであっ

た[11]。

イギリスが近代スポーツの発祥地となることができたのは，資本主義化の導入によって，封建領主たちへの国王からの拘束が少なく，自由度がヨーロッパ大陸の領主たちに比べて相対的に高かったからであるといわれている。もちろんこれだけでは十分な説明とはなっていないが，いくつかの要因・背景の一つとして妥当であろう。こうして人々が余暇の中で求める興奮，スポーツに期待する興奮，抑制されたルール，感情規制の公的，私的レベルが社会的に形成されてきた。

エリアスは近代化，文明化とは人間の暴力への自己抑制が強まった社会と捉えた。そのために規制された社会では公認ルール（非暴力化）に則り，その範囲で公然と発散できるスポーツの必要性が高まったと考えた。もちろんこの興奮とは身体活動，身体形成要素に支えられると同時に，他方ではルール性，技術，用具などからなる競技様式，社会的要素とが本質レベルで結合された独特な文化であるスポーツを求めた。歴史貫通的な人間の興奮の探求の一つであるスポーツが，資本主義化，近代化の非暴力化の中で，現在のような暴力非容認のルールを持つスポーツへと発展し，普及したと捉えた。

エリアスの後継者を自認するダニングはエリアスに同調しつつ，現代スポーツの発達を考察する上で，ホイジンガ，リガウア，ストーンらの先行研究を概観し，彼らは「発達過程の原動力を満足に取り扱っていない」，「工業化に関連した傾向を仮定しているが，集団の利益とイデオロギーの衝突には注意を払わない」[12]と批判している。その上で，社会背景を「産業化とブルジョア化」「パブリック・スクール間の対抗」として捉えた。

#### 3.1.1　産業化とブルジョア化（産業資本家の台頭）

19世紀のイギリスは産業化と権力のブルジョア化の過程であり，それまでの貴族・ジェントリーに代わって，「ブルジョアの利益と価値体系を反映するようになり始めた。」[13]「産業化」（産業革命）以前は土地貴族や商業資本家も兼ねたジェントリーらによって議会政治へ移行し，スポーツの発展において決定的な役割を果たした。とはいえ，未だ「闘鶏，牛いじめ，熊いじめ，猫焼き」（ブラッドゲーム）さらに荒々しい民俗フットボールが流行っていた[14]。しかし，議会制度の普及と併行して，貴族の自己抑制や暴力への感受性（批判性）が向上し，それは社会一般の規範となっていった。そしてこれまでのブラッドスポーツや民俗フットボールへの批判が高まった[15]。1770年代以降の工業化（産業革命），都市化以降，貴族・ジェントリーに代わって，産業資本家（ブルジョアジー）が経済的，政治的な実権を持ち始めると，文化的，社会的にも大きな変化を示すようになった。これまで前者によって後援されてきたブラッドスポーツや民俗フットボールは彼らによっても忌避され，急速に衰退した。こうして従来の貴族・ジェントリー勢力と産業資本家（ブルジョアジー）の新興勢力との対抗関係が発生したが，次第に「産業化とブルジョア化」が優勢となった。

#### 3.1.2　パブリック・スクール間の対抗

貴族・ジェントリーとブルジョアジーとの対抗は，次の世代の育成，つまり教育の場をめぐっても起きた。パブリック・スクールである。これまでの伝統的なパブリック・スクール（イートン，チャーターハウス，ハロー，シュリューズベリー，ウェストミンスター，ウィンチェスター他）は貴族やジェントリーの息子たちの教育の場であったが，ブルジョアジーも新たな階級として息子たちの教育をラグビー校などの新興のパブリック・スクールに期待した。それゆえ1840年代以降，パブリック・スクールの数は急増した。

ラグビー校は1567年にロンドンの食料雑貨商によって地域の男児たちに「文法」を教えるために設立されたものであり，設立は古いがもともとは貴族やジェントリーの子どもたちのためではなかった。1800年代中頃のＴ・アーノルドによる学校改革によって頭角を現し，1864年のクラレンドン委員会（政府機関）のパブリックスクール評価ではイートン，ハロー，ウィンチェスター校などの伝統名門校の上位に位置づけられた。生徒数400名となり，パブリックスクールでは大規模校となった。

新興校は伝統校に追いつくために，ユニークさが求められた。そこで，ラグビー校での教育改革を模倣した。その中心にラグビー式フットボールも採用した。社会的には「野蛮脱却」の風潮の中で，民俗フットボールは一部の地域を除けば，社会的な批判を浴びて次第に消失していったり，権力的に禁止されたりした。こうした中での民俗フットボールの改革が新旧のパブリック・スクールで教育改革の一環として，そしてその中心となったのである。先進工業国の整然とした秩序，文明化された行動へと進む一環として，昔のゲームに変わる新たなモデルの提供が求められていたのである[16)]。

### 3.1.3　民俗フットボールの改革

民俗フットボール禁止令の発布を見ると，初めてのものは1314年にロンドンでエドワード２世による発布まで遡る[17)]。それ以降，高い頻度で発布された。そうした民俗フットボールはその粗暴さによって社会的批判の対象となり，時には権力的に抑圧されて若干の地域を除き，産業革命前に衰退した。しかし，パブリック・スクールでは生き延びていた。なぜ，そうなったのかについて，ダニングは述べていない。これは，パブリック・スクールが生徒による自治がかなり強く，しかも閉鎖された空間だったからと思われる。

とはいえ，社会の「野蛮脱却」に押されて，パブリック・スクールでは伝統校でも新興校でも民俗フットボールの根本的な変革を求められ，1840年代にはルールの成文化を行い始めた[18)]。現実的実用性の無いラテン語と古典の教育に重点があった伝統校に対して，新興ブルジョアジーは子どもたちにより実利的で，大英帝国をリードできる質実剛健な教育を求めた。これは時代の要請であった。こうしてパブリック・スクールは大きな教育改革の時期に入り，民俗フットボールの改革はその教育改革の重要な柱として位置づけられた。

新興のラグビー校では，ブルジョアジーの息子の教育のために，アーノルドを校長に迎え（1828–1842），課外活動や寮での生徒の自治を保障する「プリフェクト・ファギング制度」を保障する代わりに，校内では学校側の権威の確保を目指した教育改革が行われた。特に課外活動では狩猟，射撃，釣りなど貴族・ジェントリー的活動を禁止し[19)]，その代わり「筋肉派キリスト教徒」（Muscle Christianity）を目指し，強健な身体，強調心，勇敢さ（男らしさ）などを育成するために，集団スポーツを緩く奨励した。緩くというのは，アーノルド自身はスポーツをことさら強調したわけではなく，むしろ他の教員が熱心であったということである。ともあれラグビー校での民俗フットボール改革の焦点はボールを手で操作してよい，競技中に相手選手の脛を蹴ってよい（ハッキング），タックルもよいという，かなり乱暴な要素を維持し，採用することになった。さらに卵形のボールを使用し，ゴールもボールを持ってゴールラインを越えたり，Ｈ型のゴールポストの上を通過したときにゴールとするなどである[20)]。これらは彼らに求められたユニークさの一環である。その最初のルールは1845年に成文化された。こうして現在のラグビーに繋がった。

一方，伝統校の代表的存在であるイートン校他でもルールの成文化は1847年に行われた。そ

の特徴は，ボールを手で操作してはいけない，ゴールは高さ７フィート，ポスト間の距離は11フィートで，その空間を通過したときにゴールとなる。こうして伝統校のフットボールは現在のサッカーへと繋がった。

1840年代に民俗フットボールはラグビーとサッカーに分化し始めたが，この時点で起きたことは以下のような変化であった。それはパブリック・スクールという空間と時間の中で運営されたことに依る必須のルール化である。①ルールの明文化，②競技場の大きさや形や境界の制限，③試合時間の制限，④参加人数の制限，⑤各チームメンバーの同数化，⑥体の部分の活用の仕方などである[21)]。

パブリック・スクールでのルールの成文化と併行して，ケンブリッジ大学でもルールの統一化が進められた。いろいろなパブリック・スクールからの卒業生がおり，同じフットボールと言っても異なったルールを持ち込むので，競技が出来なかったからである。成文化は1837，1842，1846，1848，1856，1863年と，頻繁に行われた。結局，1863年のルール決定と共にフットボール協会（FA）が設立され，サッカー型ルールが採用された。

### 3.1.4　その後のフットボール

サッカーは当初，イートン校など名門パブリック・スクールで多く享受されてきたが，「筋肉派キリスト教徒」の牧師たちは信者獲得のために教会が後援者となって労働者階級を対象にしてサッカークラブを各地に組織した。（これは現在のイギリスのプロ・サッカーチームのいくつかの母体となった。）牧師たちは布教の手段としてより危険の多いラグビーよりはサッカーを活用したのである。FA カップ決勝戦はしばらくはパブリック・スクールの OB クラブによって勝利されてきたが，1883年のそれはエリート軍団のオールド・イートニアンズとプロも含む労働者が多いボルトン・オリンピックとの間で闘われ，後者が勝利した[22)]。これ以降，労働者階級のサッカーへの進出が促進され，やがてサッカーは労働者文化と言われるようになった。最も戦間期の労働者スポーツの高揚までは，労働者は主に観戦者としてであって競技者としての参加は，彼らの余暇所有の少なさと関わって，決して多くはなかった。

一方ラグビーはサッカーの普及に危機を感じ，1871年のラグビー・ユニオン（RU）を結成した。以降，頑なにアマチュアリズムを維持し（1995年まで），労働者階級（プロ）を排除し，ブルジョアのステータスを維持した。地域のラグビークラブもパブリック・スクールの OB たちで占められ，そこに参加することは彼らのステイタスシンボルでもあった。しかし，イングランド北部，中部ではサッカーと同様，工場経営者が労働者を集めてプロ集団を養成し，ラグビー・リーグ（RL）を結成（1895）した。

### 3.1.5　E・ダニングの特徴と課題

ダニングは近代スポーツの発祥について最も踏み込んで研究している。しかしその歴史観，つまりエリアスのフィギュレーション社会学に依拠していることから，やや曖昧な所も見受けられる。エリアスの「文明化過程」とは「中世期と現代の中間期に西欧社会に起こった，顕著な無方針で無意識，あるいは盲目的な長期の社会過程を示す，評価的な用語」[23)] である。近代化の過程で議会の非暴力化が社会規範としても促進された。興奮の探究の文化であるスポーツは非暴力化の社会規範を受けてルール化して合法化され，社会に適応して，普及した。スポーツも文明化の一環として把握される。この文明化論の表層性についてはここではこれ以上触れない。ただ，歴史研究における相関性と因果性について，また近代の資本主義化への経済的，政治的，思想的な発展との関連が殆ど指摘されないことが不自然である。現象論的には誤りではないとしても，それらの近代化を規定した社

会背景は，封建制から資本主義への，経済的，政治的，社会的な移行，特に近代化，市民社会化との関連で捉えられるべきであって，それらとの関係が弱く，あるいは切り離された把握は，表層的にならざるをえない。

それは，ダニングの意味する産業化（工業化），都市化などの表現に典型的に見られる。確かに，19世紀中頃に起きたラグビーやサッカーの発祥の背景として産業化があったことは歴史的に事実だが，その指摘だけでは必要条件となっても十分条件とはなりえていない。また，ラグビー校でのフットボールの改革はブルジョアジーの教育要請であることは若干触れられるが，イートン校などの伝統校での改革の背景には触れられていない。しかし後者の場合にも，同じ産業化，都市化の規定は受けていることも事実であるが，ここでは見過ごされている。

それでは一体，産業化，都市化の何がスポーツの発祥を規定したのか，そしてラグビー校やイートン校などでのフットボール改革の背後に基底要因として何があったのか，が問われるべきであろう。資本主義的エートスを最も体現しているブルジョアジー（新興校としてのラグビー校に象徴される）とそれに対抗しながらも影響された貴族・ジェントリー（伝統校としてのイートン校に象徴される）らが，彼らの後継者養成の場であるパブリック・スクールの教育改革を熱心に推進した。しかも両者に共通したのは，社会的には野蛮さ故に批判の対象とされた民俗フットボールを改革しながら教育改革の中心として採用したことである。これはダニングの指摘する両グループ間の対抗心を超えて，改革されたフットボールがブルジョアジーとしての親，OB，支援者たちの意図する教育効果を大いに期待できたからである。その要請の源泉の究明こそが必要である。まさに個人スポーツでは養成しえない，当時の荒々しい集団スポーツの持つ性質に依拠した根底の究明が必要である。

最後に，「資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか」という視点をダニングに問うてみると，①工業化，都市化が規定した，②新旧パブリック・スクールの対抗がラグビーやサッカーを生んだ，という回答のみが得られ，①のより詳細な内実と，②の背後に，なぜそれらの学校が民俗フットボールを改革し採用したのかについての理由については踏み込んでいない。

### 3.2　R・ホルト，JA・マンガン

次いで，イギリススポーツ史研究の双璧であるホルトとマンガンについて概観する。ホルトは『スポーツとイギリス：１つの近代史』でイギリスのスポーツがパブリック・スクールによって19世紀後半に極めて大きく発展したことを示した。産業革命以前にはジェントリーや旧貴族に支援されていた民俗ゲームは「伝統」となった[24)]。とはいえ，サッカーやラグビーは大衆の伝統である民俗フットボールに共通の起源を持つものであり，発明（Invention）ではなく刷新（Innovation）であるとする[25)]。この点は先のダニングとも共通する。

クリケットは最初の集団スポーツであり，1787年にはメリルボーン・クリケットクラブが結成されたが，サッカーやラグビーとは少し趣を異にする。後２者はパブリック・スクールやその OB たちの独占物であったが，クリケットでは貴族（Gentlemen）たちが平民（Commoners）や召使い（Servants）と一緒にプレイした。平民や召使いはプロとして括られた。貴族＝アマチュアが主にバッターで，プロはボウラーであるという大まかな分類があった。ボウリング（投球）はかなり厳しく厄介な仕事であり，それらの大半はプロに任したのである。なぜならばもしジェントルマンがボウラーとして投球して，それを社会的に劣るプロによってグラウンドで無慈悲に打ち込まれるのはみっと

もないことであり，階級的屈辱であったからである。さらに，プロはグラウンドの整備，装備の掃除，貴族への飲み物の提供等を行った。試合では貴族とは別の入り口から入場すること，別の部屋で更衣することなどが課された。試合中は彼らの名前は異なって呼ばれた。普通，ジェントルマンは名前の頭文字が名字に先行するが（例えばR・Holt），プロの場合，名字の後に名前の頭文字が来た（Holt・R）。これらの識別と差別を温存することによって，クリケットではジェントルマン・アマチュアと被支配階級のプロが同一チームで同居することを可能とした。しかし，アマチュアが十分にいる場合にはプロは参加できなかった[26]。というわけで，クリケットはアマチュアプレーヤーの数の補充としてプロが活用されたのであり，チームワークなど，当時の要請された集団的精神の形成にはあまり有効ではなかった。

マンガンは著書『ヴィクトリア朝・エドワード朝のパブリック・スクールにおけるマッスルクリスチャニティ：教育イデオロギーの発生と確立』のタイトルのようにパブリック・スクールにおけるアスレティシズムの成立と普及を，彼の分類する6つのタイプのパブリック・スクールを事例に詳細に分析した。そもそもアスレティシズムとは，19世紀後半におけるパブリック・スクールでの集団スポーツ重視（批判者にとっては偏重）をした教育改革を理論的に整合性を付けるために完成されたイデオロギーであった[27]。

当時のパブリック・スクールは生徒の自主性という名の下に，密猟，不法侵入，多くの不法行為など，近隣住民とのトラブルも絶えなかった。こうした生徒をなだめるための「社会統制」としてもアスレティシズムは生まれたのである[28]。それはまた19世紀末の大英帝国に進んで参加し，「帝国の保護と拡張に疑問無く喜んで命を提供する高貴な少年を育成するナショナリズムの養成」とも結合した。それは当時の大英帝国と国内産業，政治を統治する中上級階級の要請に応じたものだった[29]。

こうして形成されたアスレティシズムだからこそ，1850年代から1900年代の初頭までパブリック・スクールの教育理念や実践として，圧倒的な影響力を形成した。そのアスレティシズムの教育力はフランスの教育学者であったクーベルタン男爵にも影響を与え，古代オリンピックへの憧憬と共に，後に近代オリンピック復興の直接動機の一つとなったのである[30]。

このような状況の中で，1870年代から1880年代に掛けてすべてのゲームが週に何回か，また，フットボールは毎日必習となった。この影響で，パブリック・スクールばかりでなくオックスフォード大学やケンブリッジ大学などでは生徒・学生の学力低下を指摘する批判も上がるほど，ゲームは偏重との指摘も上がるくらいに重要視された[31]。それらを反映して，学校の運動施設の数と質がパブリック・スクールのランク付けを決定するまでになった[32]。その一例を図表2に示す。購入ないし借用地の面積を1845年と1900年とを比較したものである。例えばハロー校では1845年には8エーカーだったものが1900年には146エーカーと18倍となっている。146エーカーとは100 m四方（大まかにサッカーやラグビー場の大きさ：約2.5エーカー）に置き換えれば約60面の広さであり，生徒数数百人のハロー校のサッカー場自体は38面であっ

**図表2**　購入ないし借り入れられたゲーム地の面積

| | 1845 | 1900 |
|---|---|---|
| Harrow | 8 | 146 |
| Marlborough | 2 | 68 |
| Uppingham | 2 | 49 |
| Lancing | 0 | 14 |
| Stonyhurst | 2 | 30 |
| Lorreto | 0 | 22 |

出典：J. A. Mangan，注27）の p. 71

た。マールボロ校でも28面分である。ここにはイートン校やラグビー校などが含まれていないが，ハロー校に匹敵ないし凌駕するだろう。パブリック・スクールは日本の中学校＋高校に相当するが，当時の生徒数も500人を超える所はなかっただろうから，このグラウンドの多さ，広さは驚嘆に値する[33]。

当然，これらの購入資金は父母や卒業生，理事会それに賛同者などからの寄付金であるから，当時の寄付額がいかに莫大なものであったかが理解できる。それはそうした後援者たちの教育への要請とその支援の強さを示している。そしてその資金源は世界中に広がる植民地支配と同じく世界に先駆けた産業革命の上に立つ大英帝国であったから出来たことである。

### 3.3　T・ヒューズ

1823年，ラグビー校のグラウンドでは民俗フットボールが行われていた。生徒ウィリアム・ウェッブ・エリス少年のところへボールが飛んできた。ボールを持ってその場にいれば相手選手たちからのタックルやハッキング（すね蹴り）をくらい，怪我をしかねないことから，少し気弱なエリス少年は，当時禁止されていたボールを手に持って自陣のゴールへ突進した。これは明らかにルール違反であったが，当時，批判の強かった民俗フットボールの改革の意識が生まれ始めていた時期であることから，この少年の行動から，ラグビーの原型が着想された。それゆえ『トム・ブラウンの学校生活』[34] でますます名声を馳せていたラグビー校では1895年に以上の「伝説」を作り上げた。そしてラグビー校の校庭の塀には，「1823年，このグラウンドにおいてウィリアム・ウェッブ・エリス少年はボールを手で持って運ぶという不名誉な名誉ある行為を犯した。ここにそれを記念する。」と掘られたレリーフが今でも飾られている。

この本は小説であるが，著者のヒューズが1834年から８年間通ったラグビー校の雰囲気がにじみ出ていると言われる。著者ヒューズが入学したのは校長アーノルド（1828–1842）の着任６年後であるから（両者の卒業と退職は同年である），教育改革は一定の成果を示していたと思われる。しかし小説としてはその過程の，当時の生徒の無法ぶりや，公認された飲酒，民俗フットボールの位置付けや生徒の自治活動の在り方，その中での生徒の対立，葛藤，自律と成長の過程がリアルに描かれている。そして校長アーノルドの生徒との対応，教師たちの学校運営も具体的である。

もちろんこの本は，クリスチャン・ソシアリストとしての著者が若者への教訓書として著したものであるから，幾分か脚色され，教訓めいた箇所もあるが，当時の状況がリアルに記述され，ルポルタージュとしての価値も有している。

### 3.4　A・ヴォール

ヴォール（ポーランド）は近代スポーツの発祥について，概ね以下のように述べている。封建社会での身体文化（スポーツを含む身体的運動の総称）は騎士の軍事的性格が強かった[35]。特に「騎士の７芸」（馬術，剣闘技，斧あるいは槍による馬上戦の心得，弓術，水泳，格闘，フェンシング）が特徴的であるが，やがて中央集権の商品化＝貨幣関係の拡大に伴い，封建的軍事組織が解体し，封建社会の身体文化も衰退した。この過程で騎士の７芸も没落した。

フランス革命（1789年）による資本主義化は封建貴族層を壊滅させ，彼らの生活様式と怠惰を政治革命によって壊滅させた。しかしイギリスの近代化への革命は，経済的な改革を伴いながら，封建領主に特有の生活様式を温存させながら，資本主義的な地主に変えていった[36]。政治的には緩慢な革命であった。それゆえ，イギリスでは貴族・ジェントリーに支援された貴族スポーツ，パトロンスポーツが普及した。その

典型がボクシングであり，次第に近代ルール化への１番乗りを果たした。また当時は，祝祭日，安息日には教会の広場や村長の屋敷で恒例の奉納農民競技会が行われ，その際重量挙げ，レスリング，跳躍，競走，的当てなどが行われた。

民俗フットボールとホッケーは1830年代には卑しい民衆だけに当てはまる競技と考えられていたが，それがブルジョアや貴族などの中上流階級によって昇格されるには600年以上も待たねばならなかった[37)]。600年以上も変わらず蔑みの対象とされてきた民俗フットボールは，なぜ1840年代以降に変わったのか，この理由をヴォールは述べていない。1770年代の産業革命の開始以降台頭してきたブルジョアジーは貴族・ジェントリーの放縦さに対抗して，ピューリタン的禁欲主義な倹約，節制，勤勉，日曜日のスポーツ競技会の開催を禁止したりした[38)]。

1800年当時，ヨーロッパ大陸側の諸国ではイギリスが産業革命（機械制大工業）に入っていたのに遅れてマニュファクチュア（工場制手工業）期に入りつつあった。ヤーン（ドイツ）の器械体操もリング（スウェーデン）の体操も偶然の産物ではなく，マニュファクチュア期の工場制手工業での技術とこの時代の軍隊における武器操作を反映した「労働技術学」を基礎に成立した[39)]。基本的な単純化された運動に基づくその訓練によって確かに優れた矯正作用を持つことが実際に示され，一面的労働によって引き起こされる疲労を阻むことが出来た。それらの体操は各国で，ナショナリズムとも結合して大衆運動となった。

一方，イギリスで発祥したスポーツには工業における近代技術の発展と新しい労働技術に含まれるものと同じ要素が，すなわち，テンポ，強い集中力，大きな精密度と熟練，素早い運動反射，そして競争が適用されていた[40)]。しばしば体操とスポーツの対立が起きたが，ことごとくスポーツが優位であった。スポーツの持つ競技性の面白さと，スポーツの競技形態が産業革命期の社会的要請（例えば集団性）に対応していたからである。体操はスポーツに次いで第２の地位へ退いた。

ヴォールは自らの研究方法論として次のように述べる。「スポーツの発展を主として決定するのは，スポーツ運動のメンバーが設定した目標でもなく，また理論家やスポーツ・ジャーナリストが発表した意見でもなく，むしろ社会・経済体制によって形成された客観的な社会的諸関係であ」るとして，生産と軍隊の影響を重視する[41)]。

この指摘は研究方法上，極めて重要である。他の論者が指摘しなかった論点であり，ヴォール自体はマニュファクチュアの「労働技術学」が体操を産んだという指摘だけで，集団スポーツの規定要因には触れていないが，そこへの示唆を示している。

その上で，スポーツの発展段階として次の３段階を提起している。

第１段階は，資本主義的工業化の開始と一致する時期であるが，工場制手工業であり，利潤の決定はもっぱら労働時間の長さで決まるマニュファクチュア期である。この時期伝統的な地方的ゲームが見直された。

第２段階は，国内的・国際的抗争が激化する時期である。特に軍隊が強化された。19世紀の大陸でのマニュファクチュア下での体操・トゥルネンの誕生やイギリスの産業革命下でのスポーツの発祥の時期である。

第３段階は，帝国主義時代，暴力による階級的・国際的抗争の時代である。そしてスポーツが本格的に普及した時期である。

以上がヴォールの主張の特徴であるが，体操とスポーツを識別した。先のダニングは主にイギリスを対象としたから体操の誕生は無く，扱わなかったが，大陸側ではイギリスからのスポーツの導入と併行して体操が開発されていた

から，このような構想となった。

ここで，「資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか」という視点をヴォールに問うてみると，資本主義の社会・経済体制，活発な生産体制としての指摘はあるが，その内実には触れていない。

### 3.5　A・グットマン

グットマン（アメリカ）は各時代におけるスポーツの性格を図表３のように捉えた[42]。つまり，歴史的には原始，古代ギリシャ，古代ローマ，中世そして現代である。その現代スポーツを M・ウェーバーに依拠しながら世俗化，平等化，専門化，合理化，官僚化，数量化そして記録化の７項目で把握する。現代（Modern：訳者によって近代または現代としている。）はその全ての性格を有するとしている。

７つの性格の内容はグットマン著『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義―』[43] の中で以下のように要約されている。それに対する私の解釈も含めて以下のように指摘する。

**3.5.1**　世俗性：前近代のスポーツが霊的なものや聖なるものといった超自然的領域に関与した宗教的儀式化を多く伴っていたのに比して，近代スポーツは，儀礼的側面を持ったり，強烈な感情を呼び起こしたりする傾向を持つが，決して霊的，聖的な特質を持つものではない。その意味で世俗化した。

**3.5.2**　平等性：前近代ではスポーツ競技会は支配階級に独占されてきたが，近代スポーツ，特にアマチュアリズム崩壊後の現代においては，理論上は，個人の属性（階級，人種や民族等）を理由に参加を拒否されない。これはスポーツに参加する上での社会的な平等化である。そしてスポーツのルールもすべての参加者に共通である事が求められる。

**3.5.3**　官僚化：古代スポーツ特にギリシャ，ローマの各競技会の多くは宗教儀式と結合していたことと関わり，多くが聖職者の秘密会議によって，あるいは儀礼に通じた神官たちによって支配されていた。しかし近現代では国家的ないしは国際的官僚機構（例えば国際オリンピック委員会や国際サッカー連盟など）によって管理されている。

**3.5.4**　専門化：近代スポーツの多くはラグビー，野球，アメリカン・フットボールなどのように，かつてはさほど違いの無かったゲームから分化，進化して各スポーツとして確立した。さらに今ではクリケット，野球，フットボールなどの集団スポーツでは，チーム内ポジションが専門分化し，役割を分担するようになっている。もちろんこれはスポーツの高度化，プロ化とも関わっている。

**3.5.5**　合理化：近代スポーツのルールは目的―手段という観点から絶えず吟味され，頻繁に修正される。競技者たちは科学的トレーニン

**図表３**　各時代におけるスポーツの性格（○はあり，×はなしを示す）

| | 原始的 | ギリシャ的 | ローマ的 | 中世的 | 現代的 |
|---|---|---|---|---|---|
| 世俗化 | ○× | ○× | ○× | ○× | ○ |
| 平等化 | × | ○× | ○× | × | ○ |
| 専門化 | × | ○ | ○ | × | ○ |
| 合理化 | × | ○ | ○ | × | ○ |
| 官僚化 | × | ○× | ○ | × | ○ |
| 数量化 | × | × | ○× | × | ○ |
| 記録化 | × | × | × | × | ○ |

出典：A. グットマン『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ，1982，p. 94

グを積み，最新の技術を駆使した用具を使用する。自らの技倆を最も効率的に発揮できるように懸命に努力する。それは試合のより合理性の探究や科学的な練習法の探求でもある。

**3.5.6**　数量化：現代生活のすべてにおけるように，近代スポーツも数量的世界に生きている。統計はゲームにとって不可欠な部分を構成するようになってきている。戦術もこれによって大きく決定される。もちろんこれは計測機器の発展と密接に関わっている。こうすることで，時代を超え，地域を越えて記録化でき，その比較ができるようになった。

**3.5.7**　記録化：かつての競技は勝ち負けだけの判定のみで，数量化ができなかったから，計測化，記録化も厳密ではなかった。しかし現代はそれが可能となり，その分記録への固執が強まった。「記録」という優れて近代的に表現される数量的達成は，それを塗り替えることによって現代版の「永遠の生命」を手に入れようとする人々にとって，飽くなき挑戦の対象となっている。

以上が資本主義におけるスポーツの特性であり，資本主義社会がスポーツの性格をも規定していると捉える。そしてグットマンはさらに，資本主義社会におけるスポーツの世界への普及，伝搬を経済的規定による「文化帝国主義」ではなく，もっと多様な要因が関わった「文化ヘゲモニー」として捉えている。とはいえ，資本主義段階でスポーツが普及，伝搬したことは，基盤に経済的基盤を承認せざるを得ないであろう。グットマンは資本主義の形成過程とスポーツを関連付けているわけではなく，結果論としての特徴付けであるが，古代，中世との比較によって近現代を特徴付けている。

### 3.6　T・コリンズ

コリンズの『資本主義社会のスポーツ』[44] は，エリアスやグットマンの把握は表層的であると批判し，マルクス主義の立場から社会構成体としての生産関係としての土台と上部構造との関係をより強く意識して，商業化によるスポーツ，特にプロ・スポーツの発展を把握している。資本主義化に伴って土着のゲームが廃れ，資本の集積化に伴う都市化や市場化と共に集団スポーツ（サッカーやクリケット他）の普及，さらにマスコミの発達とスポーツ普及の相乗効果そして帝国主義化とスポーツ普及など，対象自体はグットマンと重複する部分もあるが，資本の発展，その所有形態としての帝国主義などの経済基礎との関係をより強く自覚した方法論となっている。

### 3.7　先行研究のまとめ

以上の５つのスポーツ史研究（１つの小説は除外）は，資本主義社会の諸側面を反映して，スポーツがいかにして影響を受け，発展してきたかを示している。また政治的・経済的要因についての把握に深さ，浅さはあるが，スポーツが社会から規定されたという点での方法論は共通している。例えば，エリアスやダニングの指摘する「産業化」「都市化」もそれ自体は間違いではない。しかし問題は「産業化」「都市化」の何が近代スポーツの誕生を規定したのかについての追究が無い。

もう一歩踏み込んで，これまでの前史と異なって，そもそも①資本主義はなぜ，国民に（そして女性に）スポーツを普及させるのか，②近代スポーツはなぜ，イギリスで発祥したのか，③資本主義はなぜ，集団スポーツを産んだのか，という視点には応えていない。その結果，上記の論者たちに共通するもう一つの問題点は，国民のスポーツ参加という視点からの検討に欠ける，あるいは弱いことである。このことは，資本主義社会における階級差別であるアマチュアリズムの成立と崩壊の根本的原因の究明や，女性のスポーツ参加を抑圧する基底要因の解明，

さらには戦後の福祉国家において全国民のスポーツ参加を促進する「スポーツ・フォー・オール政策」，そしてその法的根拠である「スポーツ権」がなぜ誕生したのか，その中で国民のスポーツ参加がなぜ国民の権利となるのか等の究明の立場を確立できないのである。

## 注

1）『広島経済大学　研究論集』第40巻第２号，2017年９月
2）内海和雄「女性スポーツの誕生」『広島経済大学研究論集』第40巻第４号，2018年３月
3）内海和雄『スポーツの公共性と主体形成』不昧堂出版，1989
4）内海和雄「第４補論　人類史と『体力』：『摂取＝消費 2200 Kcal 法則』」，『オリンピックと平和―課題と方法―』不昧堂出版，2012
5）内海和雄「第６章　スポーツにおける遊戯と遊戯性」『スポーツの公共性と主体形成』不昧堂出版，1989
6）内海和雄『スポーツ研究論―社会科学の課題・方法・体系―』創文企画，2009，p. 57～
7）同前参照
8）内海和雄『アマチュアリズム論』創文企画，2007
9）内海和雄『スポーツと人権・福祉』創文企画，2015
10）N・エリアス，E・ダニング（大平訳）『スポーツと文明化―興奮の探究―』法政大学出版，1995（原典1986），p. 252
11）同前，p. 252
12）E・ダニング，K・シャド（大西，大沼訳）『ラグビーとイギリス人：ラグビーフットボール発達の社会学的研究』ベースボール・マガジン社，1983（原典1979），p. 19
13）同前，p. 83
14）同前，p. 31
15）10）の p. 251
16）12）の p. 53
17）10）の p. 256
18）12）の p. 79
19）12）の p. 93
20）12）の p. 101
21）Eric Dunning and Graham Curry, ‘Public schools, status rivalry and the development of football’, *Sport Histories - Figurational studies of the development of modern sports*, Eric Dunning et.al.（ed.）, Routledge, 2004, p. 41
22）E. J. ホブズボーム「伝統の大量生産：ヨーロッパ，1870–1914」，E. J. ホブズボーム，T. レンジャー編『創られた伝統』紀伊國屋書店，1992，原典1983，p. 439　ホブズボームはこの試合を中産階級とプロである労働者階級の階級同士のぶつかり合いの象徴的転機と見ている）
23）12）の p. 11
24）Richard Holt, *Sport and the British: a modern history*, Clarendon Press, 1989, p. 12
25）ibid., p. 86
26）ibid., p. 107
27）J. A. Mangan, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School: The emergence and consolidation of an educational ideology*, Cambridge University Press, 1981, p. 18
28）ibid., p. 28
29）ibid., p. 8
30）内海和雄『オリンピックと平和―課題と方法―』不昧堂出版，2012，p. 99
31）27）の p. 84
32）ibid., p. 71
33）ibid., p. 71, 99, 103
34）T・ヒューズ（前川俊一訳）『トム・ブラウンの学校生活』岩波書店，1952（原書1862）
35）A・ヴォール（唐木・上野訳）『近代スポーツの社会史：ブルジョア・スポーツの社会的・歴史的基礎』ベースボール・マガジン社，1980, p. 11
36）同前，p. 43
37）同前，p. 114
38）同前，p. 42
39）同前，pp. 144–145
40）同，p. 129, 136
41）同前，p. 227
42）A・グットマン（清水訳）『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ，1982，p. 94
43）A・グットマン（谷川他訳）『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義―』昭和堂，1997
44）Tony Collins, *Sport in Capitalist Society -a short history-*, Routledge, 2013